

聖書：マタイ 5：17～20

説教題：律法の成就

日時：2018年1月21日（朝拝）

16節でこのようなイエス様の言葉が語られました。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」皆さんはこの御言葉を見て、どのような思いを持たれるでしょうか。これが自分の愛唱聖句だと言う方はいらっしゃるでしょうか。自分の慰めや力になる御言葉だと思う方はいるでしょうか。私自身について言えば、長らくそのようには思えない言葉でした。むしろ読むたびにプレッシャーを感じて心が落ち着かなくなる御言葉でした。特に厳しいと思うのは「良い行い」という言葉です。良い行いなんか、そうそうできるはずがない。ましてそれによって天の父があがめられるなんて、この私にどうして起こり得ようか、……。そう思って、じっくり向き合いたいとは思わない御言葉でした。しかしこれは「私にはできません」と告白するための御言葉ではありません。これはイエス様が私たちに真実にそうするように！と語っている御言葉です。イエス様がそう語っているのですから私たちにできる事柄であることを意味します。またこれは私たちの信仰はこの「良い行ない」に現れ出るものでなければならないということでもあります。

ではその「良い行ない」とはもう少し具体的にどういうことなのでしょう。そのことが17節以降で語られて行きます。まず初めにイエス様が言っていることは、律法や預言者とイエス様との関係についてです。17節に「律法や預言者」と出て来ますが、これは簡単に言えば今日の旧約聖書のことです。当時は新約聖書はありませんでしたから、聖書と言えば旧約聖書になります。その聖書とイエス様との関係です。果たしてイエス様は旧約聖書に対して、どういう態度またスタンスを取っているのか。このことについてイエス様が自ら話し出されたのは当時の人々の間にイエス様は旧約聖書に示されている神の戒めを大事にしていないのではないかという見方があったからです。たとえばその一つに安息日の問題がありました。人々はこの日は何もせず、じっとしていることが正しい守り方だと思っていましたが、イエス様はこの日にしばしば癒しのみわざをされました。それはある人々には律法を無視するあり方のように見えました。またイエス様は当時のしきたりに従って儀式的に手を洗ったり、ある人々のように断食することはされませんでした。またイエス様は取税人や罪人たちなど社会から軽蔑されていた人々

と交わり、食事を共にしました。こういったことによって、イエス様は律法や預言者を廃棄しようとしているのか、そのように見られる傾向があったのです。

しかしイエス様はここではっきり確言しています。18 節：「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」 このイエス様の言葉によって、私たちは一つのはっきりした確信を持つことができます。それは旧約聖書は新約聖書に劣らず重要であるということです。ともすると新約聖書の方がより重要で、旧約聖書は今の時代に当てはまらない第二級の書物であると見る傾向があります。しかしイエス様はそうでないと言っています。天地が滅びることがあってもこれは無効にならない。その一点一画の細部に至るまで重要であり、かつ有効なものであると。

ではもう少し突っ込んで、旧約聖書とイエス様はどんな関係にあるのでしょうか。イエス様は 17 節で「わたしは律法や預言者を廃棄するためではなく、成就するために来た」と言っています。イエス様が律法や預言者を成就する。この意味は何でしょうか。それはイエス様が来るまでは律法や預言者は成就されていなかった、すなわち十分に満たされていなかったということです。言い換えれば旧約聖書はイエス様の到来を待ち望んでいた。そしてイエス様によって今や満たされようとしていた。すなわち旧約聖書の焦点はイエス・キリストであるということになります。ルカの福音書 24 章 44 節：「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就することでした。」 聖書がこのようにキリストについて語り、キリストを指し示してきたのなら、イエス様がその聖書を廃棄されるはずがありません。イエス様はこれを捨て去るどころから、これを成就する方として来られたのです。

では具体的にイエス様はどのようにして旧約聖書を成就されたのでしょうか。聖書は私たちの救いのために神が与えてくださった書ですが、そこには神はどんな方か、神が良しとされる基準は何か、その神に受け入れられるために私たちに求められることは何か、等のことが書いてあります。そしてイエス様は特に二つの点で律法や預言者を成就する方として来て下さいました。一つは私たちが神に受け入れられるために、私たちに代わって律法や預言者が述べていることを完全に守り行う方として来られたということです。イエス様は律法の基準を引き下げたり、これを投げ捨てて私たちに救われるのではありません。律法の真意を明らかにし、ご自身がその道を完全に歩み通すことによ

って、私たちが神に受け入れられるための道を備えてくださるのです。

しかし私たちの救いのためにはもう一つのことが必要です。私たちはすでに罪を犯した者として、さばかれなければならない状態にあります。律法や預言者は、そのことも求めています。イエス様はそのために、私たちの代わりに十字架にかかってくださることを通して律法や預言者を満たしてください。旧約聖書にはやがて遣わされるメシヤが私たちの代わりに罪を負ってくださることについて語られていました。「苦難のしもべ」について語られているイザヤ書 53 章、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉が記されている詩篇 22 篇、また様々ないけにえの制度もそうです。イエス様はこれらの旧約聖書を退け、廃棄して私たちに救いをもたらす方ではなく、これらをすべて成就することによって私たちに救いをもたらす方として来て下さったのです。

さてこれまでイエス様と律法の関係について見て来ましたが、後半では救いにあずかった私たちと律法との関係について語られています。イエス様が律法と預言者を成就してくださったのなら、私たちはもう何もする必要がないのでしょうか。私たちは律法を読み、自分にはできませんと告白し、イエス様を信じて救いにあずかり、あとは気楽に、それなりに律法を心に留めて歩めば良いのでしょうか。19 節：「だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。」 イエス様がここで強調していることは、救いにあずかった私たちは戒めを軽んじてはならないということです。その最も小さなものの一つでも軽んじてはならない。神の御心は永遠に変わらないものであって、私たちは戒めを最大限に尊重し、これを守り、また人にもそう教えなければならない。さらには 20 節では「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、決して天の御国に入れません」とまで言われました。

これは当時の人々にとって衝撃的な言葉だったと思います。当時、パリサイ人たちは一般民衆から高く評価されていました。「パリサイ」という言葉は「分離する」という意味で、彼らは神へと自分たちを分離した者として、神の律法を守る聖い生活を志しました。そしてある点では律法に命じられている以上のことをしました。その一例をルカの福音書 18 章のパリサイ人と取税人の祈りのたとえに見ることができます。そこでパ

リサイ人はこう祈りました。「神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」　パリサイ人と言うと、私たちは悪い光のもとで見てしまいがちですが、もし私たちの周りで週に二度断食の日を決めて祈りに打ち込んでいる人がいるのを知っていたら、私たちはその人をどう思うでしょうか。特別に敬虔な信仰者として深い尊敬の思いをもって接するのではないのでしょうか。またパリサイ人は受けるものはみな十分の一をささげていると言っています。収入の十分の一は神のものだから、それは盗まないように！願わくはそれ以上に！という姿勢です。その原則によって歩んでいる人を知るなら、私たちはその人を尊敬するでしょう。やはり信仰者とはそうあるべきなのだ。そしてその人は人をゆるすらないし、不正をしないし、姦淫もしないし、取税人とは関わりがない。こういうパリサイ人たちは当然のように、人々から律法に熱心でイスラエルの宗教に忠実な道德家として高く見られていました。ところが「あなたがたの義はそのパリサイ人の義以上でなければならぬ、そうでなければ天国に入れない」とイエス様は言われるのです。それは非常に衝撃的な言葉であつたに違いないのです。

しかしこれは、パリサイ人たち以上にもっと律法を厳格に守れということではありません。イエス様が言っているのは質の問題です。律法学者やパリサイ人の義は、聖書の中で暴露されていますように、しばしば儀式的、表面的、また偽善的なものでした。外側しか見ることができない人間には強い印象を与えますが、心の中を見る神の前では良しとされるものではなかった。ですからパリサイ人の義にまさる義とは、心を見る神の前で良しとされる義のことです。それは見せかけではなく、心からなされるもの、また神への愛によってなされるもの、また律法の正しい理解と精神とによってなされるものことです。これは罪に堕ちてしまった私たちの生まれながらの状態からは決して出て来ないもの。これは救いの恵みにあずかり、神から新しい心をいただいて初めてできるものです。これについては旧約聖書から約束されていました。エゼキエル 36 章 25～27 節：「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」エレミヤ書 31 章 33 節：「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを

書き記す。」 救いにあずかる前の私たちにとって律法はイヤなものでしかありませんでした。自分のやりたいように生きたいと願う私たちにとって、神の律法はむしろ邪魔なもの。それをやる気は全くなし。もしやらなければならないとしても表面的、義務的、また偽善的なものになる。しかし救いにあずかると私たちの律法に対する態度は変わります。私は私に救いをくださった神にどのように感謝を表して生きようかという思いにさせられます。尊い御子まで与えてくださった神に、私はどのように私の感謝を表そうかと。その際の指針となるものは何でしょうか。それは律法に記されていること以外にはありません。ですから私たちは神に喜ばれるために律法に従って歩もうとするのです。人間の場合も同じだと思います。誰かに感謝する時、私たちはその人に喜ばれるように歩みたいと思います。神に対しても同じです。私たちは今や救いをいただいた者たちですから、救いのために、言わば点数稼ぎのために律法を守る必要はありません。ただ神への感謝の心によって行うのです。そうしないとさばかれるからといった恐怖心からではなく、神を愛する心によってです。そして神はそれを行うことができる新しい力の下に私たちを置いてくださり、私たちはその力の下で実際に律法を踏み行なう者とされるのです。

テトス書2章14節：「キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。」 イエス様が来て、十字架にかかって下さったのは、私たちがその方を信じて、あとは適当な歩みをするためではありません。それは「良いわざに熱心なご自分の民」とするためと書かれています。その良いわざとは何でしょうか。その道標となるものは何でしょうか。それは律法以外にないのです。私たちは律法を神から教えられて正しく学び、それを喜んで行う者、熱心にそれに取り組む者とされるのです。これがパリサイ人の義にまさる義の生活です。律法はイエス様を信じて救われた者たちにとっては関係が薄くなるのではなく、かえって関係の深いもの、大きな意味を持つものになるのです。ですからこの後、十戒の戒めが一つ一つ解説されて行きます。それらの律法の真意は何であるかがイエス様によって語られて行きます。そしてそこに生きることが求められます。そこにパリサイ人の義にまさる生活があるのです。

今日のイエス様の言葉から改めて学ぶことは神のみこころは変わらないということです。神は一貫しておられる方で、旧約聖書の啓示を捨てたり、撤回なさらない方。私たちに對する神の要求は前の時代に示されたことと同じです。イエス様はその律法や預

言者を成就する形で、私たちに救いをもたらす方として来てくださいました。そして救いをいただいた私たちは神への感謝をもって律法の一点一画を大事にし、それを守り行う生活へと導かれています。ただ私は罪人です！と言っていけば良いのではないのです。イエス様を通して罪の赦しをいただくと同時に、新しい心、新しい性質をいただいている者として、パリサイ人の義にまさる歩みへ進むように導かれています。その生活をもって、私たちを救ってくださった父なる神への感謝と愛を現わす生活、またそれを見る人々が父なる神をあがめることへ至る歩みへ導かれて行きたいと思います。